

モデル事業名	富士見の地域資源を生かしたビジネス・まちづくり活動の発展を通じたコミュニティ創生・地域間交流促進事業
活動団体名	知ってもらざあおらほ一のまち会
ホームページ	<a href="http://www.oraho-fujimi.jp/">http:// www.oraho-fujimi.jp/</a>
所属/ 担当者名	知ってもらざあおらほ一のまち会/早川恵理
連絡先	0266-55-6153、 <a href="mailto:eri-eco@nifty.com">eri-eco@nifty.com</a>
活動地域	長野県諏訪郡富士見町

### ● 活動地域の概要

富士見町の状況 / 人口の現状や推移：平成1年 14,999、平成20年 15,417 / 世帯数の現状や推移：平成1年 4,383、平成20年 5,613 / 高齢化率：平成1年 19.19%、平成20年 31.88% / 平成20年における農用地面積：1,341ha、耕作放棄地：田んぼ 33.6ha、畑 27.6ha、(合計 61.2ha) / 鳥獣被害額：平成10年 2,388千円、平成15年 11,264千円、平成20年 6,488千円。/平成20年度に町で行った営農に関するアンケートによると、担い手の54%が65歳以上であり、農業経営を5年後に縮小・中止したいひとが約5割を占め、後継者が農業をやる可能性は極めて低いと、まとめられている。



年々増える耕作放棄地

### ● 活動地域の課題

富士見町では、若者の都市部への流出、少子高齢化の進展により、農地の耕作放棄地が増大傾向にあり、また後継者のいない農家が大半であり、将来的に一層多くの農林地が荒廃していくとともに町の産業が衰退していくことが予想されている。これに伴い、農地に対する野生鳥獣被害が深刻化している状況にある。他地域からの人口流入も進んでいるが、多くは退職後の高齢者であり、町の福祉関係の財政を逼迫することも懸念されている。

一方、富士見町では、富士見町の地域活性化を図るべく、特産品作りや環境活動、地域間交流等を行う様々な団体が存在している。しかし、それぞれの活動は単独で行われており、活動間の連携は薄く、それぞれを地域の宝として結びつけ、情報を集約し、富士見町の魅力として発信する媒体も存在しない。行政が作るHPのように公共性・公平性などの枠に縛られない、富士見町の情報を総合的に発信できる民間主体のポータルサイト作りが求められている。また、そのような媒体を通じて、富士見内及び他地域の若者に富士見の宝、魅力を集約して発信することにより若者の流出を防ぎ、また他地域との地域間交流を促すこと、あるいは新規就農希望者等への情報提供も可能となる。また、富士見町の課題にひとつとして、集落における新規転入者と区民との認識の差による摩擦があるが、転入希望者にあらかじめ都会での暮らしとの相違点などを発信することが可能である。

また、自然豊かな地である富士見町の町づくりにあたっては、富士見の自然資源の維持保全を柱に行うことが重要である。そのためには、例えば、近年富士見町において、急激に数が減少している「ミツバチ」を一つの指標に、地域の自然環境の現状を把握し、より良い自然環境の保全、創出を図っていくことが求められている。

### ● 活動の内容

(全体)

富士見の地域資源を生かした持続可能なまちづくりを行っている団体等のネットワーク化を図り、当該団体の活動を紹介するポータルサイトを運営する。また、地域間交流、2地域居住を進めるため、姉妹都市である多摩市において地域づくり活動を行っている団体との交流を行い、協力、連携関係を構築する。

また、具体的なまちづくり活動として、人とみつばちにやさしい町づくりを進めるための活動を展開する。

### (直近1年間の進捗など)

ポータルサイトについては、スタッフブログを更新し、おらほ一のまち会の活動状況を発信するとともに、富士見町の元気人、元気チーム、特産品、元気ショップの掲載の充実を図った。

多摩地域にキャンパスを有する中央大学の総合政策学部教授・大学院公共政策研究科委員長 細野助博教授（市街地活性化、コミュニティ政策、環境教育等を研究、実践、<http://www.fps.chuo-u.ac.jp/~hosono/index.html>、社団法人学術・文化・産業ネットワーク多摩 専務理事も務める。）と細野研究室の学生を招き、富士見町に招く。今年度は、都市農村交流として、富士見及び都会にとって意義深い農業体験のあり方及び南中学校跡地利用について富士見町住民と意見交換を行った

長野県の新知事となった阿部守一知事を招き、富士見町住民による知事を囲む会を開催した。知事を囲む会では、半農半Xのライフスタイルをテーマに半農としての「新しい農のありかた」、半Xとしての「森のようちえん」「ソーシャルビジネス」に焦点をあて、意見交換を行った。

東京を中心に全国規模で、みつばちと人にやさしい町づくりを支援しているNPO法人みつばち百花、みつばちの養蜂に関してユニークな活動を行っている富士見高等学校養蜂部と連携して、富士見みつばち百花プロジェクトを行うことを通じ、人とみつばちと自然環境にやさしいまちづくりを展開する。富士見町の町の特性、気候等に即した蜜源を増やす方策を検討し、実践することを通じ、富士見町の農業生産力を高め、農地や山林の生態系を豊かにし、富士見町の魅力を高めることを目的とする。今年度は、当該目的に向かって、活動主体や活動の方向性を形づくっていくため、みつばちの生態やみつばちをキーワードに町づくりを行っていくための方策についてセミナー・ワークショップを開催した。

### ● 活動の成果

#### ・全体/直近1年間の成果など

HPでの情報発信を通じ、元気人、元気チームの活動がより活性化をするとともに、おらほ一のまち会の活動のネットワークも広がった。また、富士見町に関心を寄せる人々へも行政による情報発信では得られない、市民の暮らしぶりについての貴重な情報発信を行うこともできた。

他地域交流については、中央大学細野研究室との交流を本格的に行うことができ、富士見町の農業や中学校跡地利用について、学生から貴重な意見、提案をいただくことができた。

阿部知事を囲む会においては、富士見町の農業や森のようちえんなどの活動の実態を県側に伝え、富士見町の実情を踏まえた政策提言等を行うことができた。

富士見みつばち百花プロジェクトにおいては、3回のセミナー開催により100名を超える参加者を得、地域おけるみつばちの生態に関する知見を高め、蜜源を増やすことにより地域の資源生態系を復元する活動の契機を得ることができた。

みつばち百花プロジェクトにおける挿し木ワークショップの様子



● 今後の課題及び展望

・課題（活動を通して発見された課題等を記入）

資金が不足する中で、HPの一層の充実を図っていくこと、継続的な更新を行っていくことが必要不可欠である。

富士見みつばち百花プロジェクトにおいては、セミナーで学んだことをもとに、具体的な蜜源拡大の町づくり活動に展開を図っていくことが必要。

・展望（今後の取組みや検討について記入）

知ってもらざあおらほ一のまち会と他の団体との連携を深め、より多くの団体とネットワークを構築し、富士見町の市民団体のネットワーク団体としての基盤を強化していくことが求められる。

富士見みつばち百花プロジェクトにおいては、富士見みつばちパートナー制度（蜜源作りパートナー：平成23年度の1年間にわたって、自宅の庭や畑などの場所で、季節毎にミツバチの蜜源となる多様な植物を植栽、管理してもらう方を募集、ゆるやかなネットワークを構築。蜜源の様子を定期的な報告を得、取り組み状況をパートナー間で共有）を構築し、富士見町で幅広く蜜源を拡大し、人とみつばちにやさしいまちづくりを展開する。

● その他（自由記述）

以下、おらほ一の会の活動に関する新聞記事を添付。





2010/11/21 (長)

(第三種郵便物認可)

野生みつばち

# 成育する環境づくりを

## 富士見高で セミナー 養蜂部が寸劇で活動報告

ミツバチの養蜂を通じて、自然環境の共生や豊かな地域づくりを考えようと富士見町の富士見高校で20日、第1回みつばちセミナー「富士見みつばち百花プロジェクト」が開かれた。富士見高校養蜂部が活動報告を行い、NPOみつばち百花理事で玉川大学ミツバチ科学研究センターの中村純教授が講演した。町民たちは野生のミツバチが生きられる環境づくりを考えた。

(後藤八十晴)

セミナーは、富士見町で特産品づくりに取り組む人や町の宝を発信しようと設立した住民グループ「知ってもらさあ おらほーのまちの会」、富士見高校養蜂部「ハッチ・Be

e・8」、東京都三鷹市でミツバチの蜜源や花粉源になる植物の栽培促進や養蜂を行っている「NPOみつばち百花」が共催。養蜂に興味のある町民や西洋ミツバチの養蜂愛好

家など約40人が参加した。富士見高校養蜂部は今年2月に発足し、同校園芸科の生徒らが手づくりの巣箱でニホンミツバチを養蜂している。セミナーでは活動の様子やハ

チの一生を紹介する寸劇「はちさん劇場」を披露した。中村教授はミツバチの生態をスライドで示しながら、ニホンミツバチがいる意味やミツバチとの付き合い方を説明。「ミツバチも富士見町の住民。町の環境資産が豊かであることの証明でもあり、この環境を保全、拡大しなければならぬ」と呼び掛けた。講演後にはミツバチの蜜源

となるカラミンサの挿し木ワークショップも行われ、参加者がミツバチの喜ぶ環境づくりを目指し作業を行った。セミナーは全3回。次回は12月23日に、NPOみつばち百花の朝田くに子さんの講演や町内の蜜源となる花の開花時期を記した「蜜源カレンダー」を予定している。



寸劇でミツバチの一生を紹介する富士見高校養蜂部のメンバーら



富士見高養蜂部と住民グループ

# 蜜蜂との共生を考える

## セミナーに県内外50人

富士見高校の養蜂部ハッチ・Bee・8（竹前千春部長）と、富士見町の住民グループ・知ってもらさあ。おらほーのまの会は23日、同町のコミュニティ・プラザで、第2回みつばちセミナー「富士見みつばち百花プロジェクト」を開いた。参加者らが講演会やワークショップを通して、自然環境との共生や豊かな地域づくりを考えた。（後藤八十晴）



みつろうクリームづくりを体験するみつばちセミナーの参加者ら

セミナーには諏訪地方をはじめ、駒ヶ根市や長野市、山梨県から約50人が参加した。講演では、東京都三鷹市で蜜蜂の蜜源や花粉源になる植物の栽培促進や養蜂を行っているNPOみつばち百花の朝田くに子さんが講演。「人間が美しいと感じて整備する花壇も、蜜蜂にとっては必ずしも蜜源になる花ばかりではない」とし、植物の多様性の必要を説いた。ワークショップでは「樹木」「草本」「作物」「園芸」の4班に分かれて、地域の自然環境に目を向けた。同高校養蜂部が今年採取した蜜ロウを使った「みつろうクリームづくり」も行われ、参加者が高校生を講師に、手作りの美容クリーム作りを体験した。竹前部長は「参加者が徐々に増え、地域の自然に目を向けようという心が一つになってきているのを感じる。養蜂やセミナーを通して蜜蜂の魅

力や自然環境と共存する大切さを伝えていきたい」と話していた。セミナーは2月に3回目を予定。蜜蜂が喜ぶガーデニング手法のワークショップを行う。



富士見町の住民グループは過疎地域特別措置法で「知ってもらえぬ」おらほーのまち会(エンジェル千代子代表)は6日、同町烏帽子の民家「楽の家」で「阿部知事を囲む会」を開いた。野外保育や旧南中学校の後利用について意見交換した。

国は過疎地域特別措置法で90兆円を地方に投入したが良くなっているとはいえない」とし、「住んでいる人の方が地元の良いものが分かっていない。(豊かな暮らしの)価値観を変えなければ」と語った。新規就農者の受け入れは、横浜市副市長時代の人

### 知事と野外保育、 中学校後利用語る

知事が楽の家を訪れるのは田中興政副知事時代の地域通貨のイベント以来2度目。会員ら20数人が参加し、郷土食を食べながら意見交換した。

#### 富士見の住民グループ

同会は、早川恵理さん、乙事、や、Iターンし専業農家を営む鈴木利和さん、葛窪、食用ホオズキを栽培する鈴木康晴さん、瀬沢が体験を発表した。知事は「1970年から

脈を生かし「信州と横浜市がコラボレーションできないか」と逆に提案した。野外保育に子どもを預ける主婦による「森の幼稚園」への公的支援の要請は「頭の真ん中に置きたい」と前向きな考えを示した。

旧南中後利用の質問では、JR信濃境駅から会場



「新しいライフスタイルを発信するのは地方だ」と語る阿部知事(富士見町烏帽子の「楽の家」)

### 富士見の住民有志 阿部知事「囲む会」

「半農半X」で意見交換  
富士見町の住民有志でつくるまちづくり団体「知ってもらざあおらほーのまち会」は6日、阿部守一知事を「囲む会」を町内で開いた。写真。地元住民約30人が参加。農業と自分の好きな仕事を両立させて生計を立てる「半農半X」と呼ばれる生き方をテーマに、阿部知事と意見交換した。

町特産の農産物づくりなどに取り組んでいる同会は昨年秋に発足。会員の中には「半農半X」を実践している人も



おり、普及のきっかけにしたいと囲む会を企画した。

冬は工事現場で働くという農家の男性は農業で生活できる基盤を(この地域で)つくれば移住してくる人も増える」と強調。地元の学校跡地を農産物直売所などとして利用すれば「X」の仕事が創出できる」といった提案もあった。阿部知事は「これからの時代、新しい生き方を発信していけるのは地方。行政と市民が手を携え、うまく形にしていきたい」と応じていた。